

岡本綺堂他著『山の怪談』

腰巻コピーに騙されてついつい買ってしまったが、何とも奇妙奇天烈な一冊であった。腰巻に曰く、「化け物、怪異の民俗譚、文人による心霊、不思議な話、岳人・アルピニストの遭難・恐怖・神秘体験……。実話、エッセイ、小説で浸る20の怪談……。云々」。

その筋（怪奇通筋）の民俗研究者、作家、エッセイスト、登山家など20人の著作を抜き書きして集めた一冊であるが、編者の名前も無く“著者”欄は単に“岡本綺堂 他”と記載されているだけである。前書きも後書きもなく、収録した著作の収録主旨や目的も全く書かれていない。そのような意味では、珍奇な山の怪異譚の“つまみ食いのバラバラ寄せ集め本”といわれても仕方がない類かもしれないが、マ、それはともかく。

著者は作家の岡本綺堂、志賀直哉、小泉八雲、民俗学の柳田國男、山の方では、深田久弥、上田哲農、西丸震哉、沢野ひとし、丹沢のハンスシュトルテなど錚々たる祐筆の共著となっているが、その殆どは（遙か昔に）鬼籍に入っている方ばかりであるし、またその著者達の経歴からしてとても閻魔大王の取り持ちで彼岸・此方の船着き場で生死合同編集会議でも行って、共著をモノそうと相談したフシも無い。

しかし、そのような本ではあるが、中にはただただ難解であったり、手垢に汚れたようなその道の大家の記事もあるにはあるが、逆に結構面白い記事も多かったのもので、そのうちの幾つかを紹介したい。

大体、日本人は怖いもの見たさで化け物・幽霊の類の怪談が大好きな人種なので、きっとお楽しみ頂けるのではなかろうか（底本は夫々別途刊行されているので、他の本でご覧になった方も多いのではなかろうか？）。

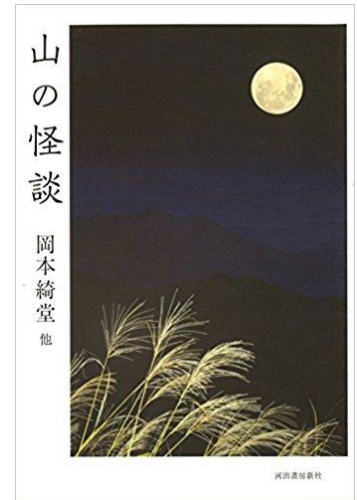
〔その1〕上田哲農「岳妖一本当にあった話」。

雪の東北の朝日岳で本当に起こった雪山遭難の怪異譚。今から80年程前の1月のこと、その日には赤い色がついた霽雪が終日降っていたそうであるが、著者の山友達のベテラン登山者2名と朝日連峰に精通した屈強な地元先達の3人が朝日岳を目指して登山口の朝日鉱泉から入山した。その日の目的地は4～5時間先の鳥原小舎までであった。

しかし、下山予定日を過ぎてても帰らず、その後10日間も続けられた懸命の搜索活動でも手掛かりは何一つ発見されず、一旦搜索は打ち切られた。雪解けを待ってから第2次搜索隊により半年後に雪に埋もれた変わり果てた姿で発見されたが、宿泊予定の鳥原小舎迄僅か300mを残すだけの地点であった。3人は服装も乱れておらず、ザックもキチンと傍に置かれ、ワカンもスキーもつけず、静かに眠るように横たわっていたという。雪崩にやられた形跡なども皆無だった。また、用意していたメンパの握り飯や持参していた食料にも全く手が付けられていなかったそうだ。

当日は霽は降っていたが荒天ではなく、また、鳥原小舎までのルートは困難な箇所も無い雪道であり、それも積雪期でも僅か数時間の行程であってみれば、何でこのような場所で、しかも3人とも一緒に眠ってしまったのか、例えば急病や何かの緊急事態が起こったとしても、2～3時間も下れば鉱泉に救助を求めることができる位置だった。このような現場の状況から考えて、遭難の原因は謎に包まれたままだった。有り得ないような余りにも不思議な遭難事故だったので、警察の手も入ったが、原因は依然分からず有耶無耶のうちに葬られた。

遭難事故処理が一段落した後、著者の家で関係者が集まって遭難原因の推定をしていたある夜、親しい山仲間の不慮の死ということに加えて不気味な内容の遭難事故だっただけに、座の空気も湿りがちだ



ったそうであるが、すると、傍らで黙って聞いていた家の者が突然言った。

「見たのと・・・違うかしら？」、

「なにを・・・」、

「なにかを・・・なんだか分からないものを・・・」。

誰も答える者はなかった。梅雨明けのいやにムシムシした晩だったようだ。

風も無く、しんと赤い曇雪が降っていたという朝日連峰の山麓深く、いったい、どんな奇怪な出来事が展開されていたのであろうか。

[その1] がちょっと長くなったが、二番目に移ろう。[その2] 西丸震哉「岩塔ヶ原」。

西丸震哉センセイは、食生態学なる怪しげな学問の開祖であるが、本職は農水省食品総合研究所といういかめしい研究機関の官能検査研究室長であったからまじめな学究でもあったであろうが、その著作『山だ原始人だ幽霊だ』や『西丸式山遊術』などを読むと、一方では何やら怪しげなご趣味をお持ちの大法螺吹き登山家でもあった。尾瀬を歩き廻ってカップ山だとか背中アブリ山だとかの珍しい地名を命名して、それが国土地理院地図にも採用されているほどの地図愛好者でもあった。

さて、その尾瀬の岩塔ヶ原というテント場で、不思議な登山者姿の、しかも同じ人物に何回か遭遇した時の様子がこの著作である。その人物はいつもテント場への入口の著者と同じ踏み跡から入って来て、張ってあるテントや登山者には眼もくれずに黙々と通り過ぎて行くのだそう。この付近には著者達以外には滅多に人も入り込まない場所なので、これは大きな疑念となった。一同手を休めてその姿を見つめていたが、その人物の余りにも奇怪な出現の様子にみんな真っ青な顔になって唇を紫色にしてガタガタ胴振いをしていたそうだ。しかも、後を追うとその人物の姿は消え失せていてどこにも無かった。

そこで或る時、その人物がいつも通って行く踏み跡を先回りして待ち伏せした。彼が向うから現れた時、「ちょっと待った！ キミ」と叫んでその人物を見ると、少し下向き加減でヨレヨレの木綿のソフト帽が顔の上半部を隠していた。彼は全く著者を無視してドンドン近づいてきた。著者は屈んでその人物の顔を見上げた途端に吃驚して横っ飛びに避けた。それは自分の25年前の顔であった。数年前に手術で除去した眼の下のホクロもちゃんと同じ位置にあった。“彼”は著者を全く見ようともせずドンドン小さくなって向うのヤブの中に消えた。これはドッペルゲンガー（自己像幻視）なる幻覚だそう。

さて、最後に三番目。[その3] 沢野ひとし「縦走路の女」。

槍穂縦走路の大キレットでのある日、ボンヤリと滝谷を見つめている30歳過ぎの小柄な女性に遇った。ザックも持たずに独りで手ぶらで立っていたそうだ。どうした訳か登山靴の片方の靴紐はほどけていた。とても槍穂縦走路に来るような登山者には見えず、どうやってこの大キレットまで登ってきたのか不思議であった。その女性とは少しばかり四方山話をしながら付かず離れずで縦走路を歩いたが、涸沢岳でその姿を見失った。ふと2年ほど前のお盆に滝谷で起こった遭難事故が脳裏をよぎった。著者が取り付いていた岩壁の上部に登っていた男女2人パーティーが墜落、ズタズタに裂けたザイルに繋がった二人の血まみれの遺体を目撃し、救助隊に通報したことがあった。滝谷の岩は崩壊がひどくて救助隊は遺体を収容することできず、瓦礫の下に埋もれた二人の遺体はそのまま放置されているのだという。

さて、この続きはこの本でどうぞ。 河出書房新社 2017年刊、本体1200円

(2018/04/22 記)